

Rosario Quarterly Information



広報 ロザリオ

社会福祉法人

ロザリオの聖母会

千葉県旭市野中4017

Tel (0479) 60-0600

ホームページアドレス

<http://www.rosario.jp>

Eメールアドレス

honbu@rosario.jp



第23回福祉作文コンクール入賞者のみなさん（平成26年12月6日撮影）

第24回（平成27年度）ロザリオ作文コンクール

福祉作文全体評

県内有数の福祉施設「ロザリオの聖母会」が、未来を担う児童生徒の皆さんに福祉について理解と関心を深めていただこうと、毎年夏季に福祉作文の募集を行って参りました。

今年度は旭・匝瑳市の十五の小学校から九十四作品、銚子・旭・匝瑳各市の八つの中学校から六十九作品、併せて百六十三の作品が寄せられました。

教育委員会、各市の小学校、中学校の先生方の御協力に対しまして厚く御礼を申し上げます。

○高齢化社会を反映してか「祖父、祖母」の介護を題材にした作品が多くありました。温かく、熱心にお世話している様子が書かれた作品があり感心しました。

○福祉施設を見学したり、お世話の体験をした作品も多くありました。訪問して利用者の皆さんにたいへん喜んでいただいたという内容も多くありました。

○福祉の大事さ、命の貴さ、人間としてどのように生きていくべきか、などを考えた作品も多くありました。

○障害者を差別、軽蔑、厄介者扱いした作品がまったく無いのは、日頃の学校や家庭の教育成果と敬服いたしました。

○良い作品と考えたものは

- ・書こうとする内容が鮮明な作品
- ・傍観的立場でなく、主体的に実践した作品。
- ・文章構成が「段落の区切りが明確」「内容の焦点が明確」な作品。
- ・差別、軽蔑的な表現の無い作品。
- ・読みにくい薄い筆記でなく、誤字のない作品。

どうぞ今後も福祉作文について御協力をお願い申し上げます。

平成二十七年十二月

【審査委員】

- 楠木 正
（元中学校長・指導室長）
- 真久 孝昭
（元中学校長・指導主事）
- 松井 安俊
（元中学校長・指導主事）
ロザリオの聖母会理事

4 年 生 選 評

- 1席 旭市立矢指小学校
平野桂大さん
- 【えがおになるパン】
障害のある人たちがいっしょけんめいに仕事をしているようすがよく書けています。

- 2席 旭市立中央小学校
江波戸莉夢さん

【私の姉】
お姉さんのお世話ごころう様。実に病状をきちんと判断して、しんせつにあたたかくお世話しているのに感心しました。

- 3席 旭市立嚶鳴小学校
浅野心優華さん

【年をとるといふことは】
障害のあるお年よりの施設へ行っていろいろなことを知り、よかったですね。これからも行ってはげましお手伝いをしてください。

- 3席 旭市立共和小学校
宮野明日葵さん

【わたしのへんこさんたち】
お年よりの世話をする中で福祉についてよく考え、よく理解していることに感心しました。

5 年 生 選 評

- 1席 旭市立豊畑小学校
五十川彩さん

【ともこ生きる(とこ)】
共に生きる大切さがよく書けています。障害があるからかわいそうではないことに気づいてえらいと思います。

- 2席 旭市立琴田小学校
山崎彩加さん

【共に生きる大切さ】
共に生きる大切さについて書いてありまして感心しました。

- 3席 匝瑳市立豊栄小学校
齋藤望愛さん

【学校での福祉体験で】
認知症についてよくわかりましたね。これからのようにこれらの人に接したらよいか考えてください。

- 3席 旭市立三川小学校
熱田真奈さん

【福祉施設の見学】
施設を見学して、お年よりにちががらばって生きているようすが知ったのはえらいですね。

- 3席 旭市立中央小学校
大塚莉々さん

【私のおじいちゃん】
元気だったおじいちゃんが障害者になり家の人は、しんせつにあ

たたかくお世話をされていて感心しました。

6年生選評

○1席 旭市立共和小学校

嶋田莉子さん

【高い者の生きがい】

おじいちゃんがデイサービスでお世話になっている施設を見学しました。そこでの高齢者や職員とのふれ合いを通じて、お年寄の生きがいについて考えさせられました。

高齢者には、人と人とのつながりが必要で、それを守っていくのは若者の役目だと訴えています。

○2席 旭市立中央小学校

遠藤風夏さん

【私の家族】

おばあちゃんが亡くなって気落ちしているおじいちゃんを、何とか元気づけようとあれこれ考えてお世話している様子が、目に浮かぶようです。

おじいちゃん思いの温かな心

が、生き生きとつづられています。

○2席 旭市立干潟小学校

高橋郁帆さん

【福祉について考えた事】

介護福祉士をしていたお母さんの具体的な話や、学校で体験した交流活動を通して、介護についての理解が深まりました。これからの実践への意欲が感じられます。

○3席 旭市立嚶鳴小学校

鈴木那奈美さん

【わたしのひいおばあちゃん】

ひいおばあちゃんが骨折して入院。リハビリのためシルバーセンターですごしているが、その様子を通して介護する職員の大変さが理解できました。退院したら積極的に介護をしようと思

うようになり、頼もしいですね。

○3席 旭市立矢指小学校

角川裕大さん

【ぼくの弟】

障害のある弟を温かい目で見つめ、少しずつ成長している点と一緒に喜んでいきます。また、他の障害のある人を助けたり、いろいろなことにもチャレンジしているという姿勢が、立派です。

○3席 旭市立干潟小学校

深田妃色さん

【ふたばクラブにて】

障害のある弟を心配していたが、「ふたばクラブ」で、他の子どもと仲良く過ごせていたので安心。この体験を通して、他の障害をもった人や、障害者を助けたいという心のやさしい人達にふれ合えて良かったですね。

中学1年生選評

○1席 銚子市立第五中学校

白土怜佳さん

【乗りこえた先の幸せ】

六年前、祖父が突然脳出血で倒れてから、生活がすっかり変わってしまいました。介護に追われる家族の大変さがリアルに表現されています。辛いことを乗りこえようとする祖父の勇氣ある姿からいろいろ学び、役に立つ人になりたいと思うようになったのは立派です。

○2席 旭市立第二中学校

加瀬喬大さん

【身近な介護】

急に歩けなくなってしまった祖母を、家族みんなで介護する様子が具体的にえがかれています。介護の大変さ、体の不自由な人の苦勞が身にしみて分かりました。人と人との助け合いがいかに大切かを学びました。



○2席 旭市立第二中学校
花澤日向さん

【私のひいおばあちゃん】

在宅介護がいかに大変か、九十八歳のひいおばあちゃんのお世話を通して、家族の協力や、私の心情がしっかりと表現されています。福祉の充実に向けて、少しでも役立つ人間でありたいと思うようになったのは、えらいですね。

○3席 匝瑳市立八日市場第二中学校
大目幸輝さん

【祖母の車いす介助体験】

転んで自力歩行が困難になった祖母の車いすを押して、散歩の介助をしている様子が、具体的にえがかれています。これからも相手の気持ちを考え、思いやりの気持で接していきたいという決意が頼もしいですね。

○3席 銚子市立第二中学校
川端凜さん

【マリリンピアでの職場体験】

マリリンピアに職場体験に行くと、部屋の掃除や風呂の掃除、いす洗いなどを手伝いました。一つの仕事を丁寧にやっていると大変さがわかりました。お年寄から戦争の話や聞いた

中学2年生選評

○1席 旭市立第二中学校
大岩颯太さん

【祖父と祖母。そして僕に出来ること】

大好きな祖父祖母をよく見つめています。身体が不自由になった祖父を祖母が介護している現実を直視し、老々介護について考えています。その上で、祖父母を孤立させないようにできるだけ顔を見せに行こうと決心しています。

○2席 銚子市立第六中学校
谷下田瑠美さん

【笑顔とありがとう】

三日間の老人福祉施設での職場体験のようすが、生き生きとした文章で表現されています。やる前は乗り気でなかった職場体験が、「仕事って楽しいな。」と思えるようになりました。これからは物事を前向きに考えようとしています。

○2席 匝瑳市立八日市場第二中学校
大川晴輝さん

【思いやりー祖母から考えたこと】

一人暮らしでリウマチという病気をわずらっている祖母のために、三つのことを実行しようと決めました。そして、祖母のことにとどまらず社会全体に目を向けています。思いやりのある世の中になろうと……。

○3席 旭市立飯岡中学校
加藤希美さん

【障害についてみんなに理解してほしいこと】

身体障がい者差別の現実について、その不当性を訴えています。からかい半分で心ないことばを投げかけることが、いかに悲しいことかと。差別のない社会をめざしています。

○3席 銚子市立第二中学校
宮内彪瑠さん

【高齢者が安心して暮らせる社会へ】

老人ホームでのボランティア体験がくわしく述べられています。



一生懸命生きてほしいという曾祖母の願いを受け継いでいこうという態度は立派です。

中学3年生選評

そして、ボランティアで少しでも人の役に立てたら嬉しいと感じました。これからも積極的にボランティア活動に参加しようと決心しています。

○3席 旭市立海上中学校

浅野沙也加さん

【老人介護の大変さについて】

曾祖母の入院を通して、老人介護の大変さ、大切さを述べています。将来、もし自分が家族の介護をする時が来たら、曾祖母の介護をした祖母のように全力を尽くそうと思っています。

○3席 旭市立第二中学校

加瀬蓮さん

【ボランティアを体験して】

三回にわたる介護施設でのボランティア体験と自宅での曾祖母の介護を述べています。そのことを通して、老人が平等に介護を受けることができ、安心して老後を送ることができると社会の大切さを訴えています。

○1席 銚子市立第六中学校

山口沙織さん

【きっかけ】

怪我をしたことがきっかけで、お年寄りや不自由な人達をひとごとのように見ていた私が変わりました。単に手助けするだけでなく、不自由な気持ちを理解した上で手を差し伸べようと……。人として、一歩成長した姿があります。

○2席 旭市立第二中学校

金谷太一さん

【姉が教えてくれたこと】

小学生の時に好きだった姉を病気で亡くしました。姉は闘病中に周りの人々の明るさや励まし、氣遣いに助けられました。このような身近なことが福祉の原点ではないかと述べています。文章の表現に光るものがあります。

○2席 旭市立第二中学校

中村柊斗さん

【心のバリアフリー】

足の不自由な祖母と歩いている時、エレベーターを待っていた人がドアを開けて待っていてくれました。その気づかずに、祖母は一番の笑顔を見せました。

施設のバリアフリーとともに、心のバリアフリーの大切さを訴えています。

○3席 銚子市立第六中学校

一原彩花さん

【大きなハンデ】

一緒に住んでいる祖母が不自由な体になってしまいました。しかし、私は不自由な体の痛みや周囲から理解されない悲しみをわかりませんでした。

これからは、相手の身になって理解しようと思っています。

○3席 旭市立第一中学校

大橋海音さん

【心のバリアフリー】

「目が悪いからメガネをかけている。車いすも同じ。」と言うおばさんのことばに、はっとする私。差別や偏見のない社会にしていく責任を自覚しました。

○3席 旭市立海上中学校

加瀬竜大さん

【三つの魔法】

社会を明るくするには三つの魔法が必要だということを、自分の体験を通して述べています。それは「感謝」「挨拶」「相手の目を見て話す」こと。そうすると、不思議に自分の心も明るくなります。



◆優秀作品紹介◆

えがおになるパン

旭市立矢指小学校

四年 平野 桂大

七月三十日、ぼくはロザリオの施設内にあるパン工場の見学に行きました。

ここでは、知てきしよ害やせい神しよ害がある人、発達しよ害がある人などが、ここではたらいています。そして、いろいろなはんにわかれて仕事をしていいます。

外からではわからなかったのですが、中に入るとたくさんたてものやいろいろな仕事があるのにびっくりしました。また、五十四人ものがはたらいていることにおどろきました。その人たちがみんなそれぞれの仕事にせきにんをもってやっています。

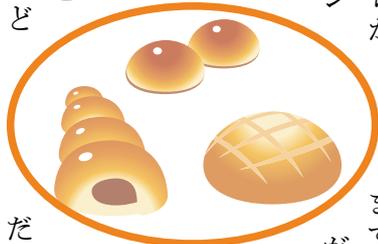
たとえば、虫などが入らないように気をつけたり、おいしそうな

トマトを分けてつめたり、おつりをまちがえないように気をつけたりしています。ぼくは、「大変だな」と思いましたが、はたらいている人は「つかれない」と言っていました。そして、「楽しい」と言っていたのがとても印象的でした。

ぼくのおかあさんのはたらいている所にも、ときどきパンを売りに来てくれるそうです。来てくれる人も、ニコニコしていて楽しく仕事をしている感じがしたそうです。ぼくも、おみやげに、おかあさんにパンをあげたのですが、「とてもおいしい」とニコニコしながら食べていました。作っている人たちや、売っている人たちが、楽しく作っていると、パンもおいしくなっていて食べる人も、えがおになるのかなと思いました。ぼくもえがおになりました。

今まで、何度も近くを通ることがあったけれどロザリオというところがど

ういうところで、どんなことをしているのかなどぜんぜんわかりませんでした。今回も少ししかみていないし、まだまだ知らないことばかりだと思うけれど、とても大切な場所なんだということを強く思いました。



きつとしよう害がある人は、どんなところでも仕事ができるというわけではないと思います。でも、ここで、みんなといっしょにはたらくことができて、そしておきゅうりようがもらえます。ぼくの家では「おこづかい自分がかせぎなさい」と言われています。ぼくは、お手つだいをしたり、目標を決めたりしてやっています。自分でがんばった分をもらえるのと、とつてもうれししいし、もつとがんばろうという気持ちになります。だから、こうして仕事

ができるということは、とても大事なことだろうし、家族の人もきつとうれしいと思います。ぼくもそうですが、みんな協力しながら生きています。ぼくも、いつか

だれかの役に立ちたいです。

「知らない人が多いと思います。知らない人が多くと思います。内海さんは脳性まひという重い病気をもって生まれてきた障害者の一人です。内海さんは、車いす生活を今も送っています。脳性まひとは、脳のある部分に障害があり手足を思うように動かせない病気です。内海さんは、小学校や中学校で講演を行っています。内海さんは、問いかけました。「みなさんは、障害がある人ってかわいそうだと思いますか？」そうすると子どもたちが「行きたい所へ行けない。」「たいへんそうだから。」などの意見が続きつぎにあげられます。すると、内海さんはこういいました。「障害があるからできない そう

ともに生きること

旭市立豊畑小学校

五年 五十川 彩

みなさんは、内海光雄さんという人を知っていますか？

知らない人が多いと思います。知らない人が多くと思います。内海さんは脳性まひという重い病気をもって生まれてきた障害者の一人です。内海さんは、車いす生活を今も送っています。脳性まひとは、脳のある部分に障害があり手足を思うように動かせない病気です。内海さんは、小学校や中学校で講演を行っています。内海さんは、問いかけました。「みなさんは、障害がある人ってかわいそうだと思いますか？」そうすると子どもたちが「行きたい所へ行けない。」「たいへんそうだから。」などの意見が続きつぎにあげられます。すると、内海さんはこういいました。「障害があるからできない そう

だれかの役に立ちたいです。

「知らない人が多いと思います。知らない人が多くと思います。内海さんは脳性まひという重い病気をもって生まれてきた障害者の一人です。内海さんは、車いす生活を今も送っています。脳性まひとは、脳のある部分に障害があり手足を思うように動かせない病気です。内海さんは、小学校や中学校で講演を行っています。内海さんは、問いかけました。「みなさんは、障害がある人ってかわいそうだと思いますか？」そうすると子どもたちが「行きたい所へ行けない。」「たいへんそうだから。」などの意見が続きつぎにあげられます。すると、内海さんはこういいました。「障害があるからできない そう

いうことはたくさんあります。けれど、できないって悪いことじゃないなって私は思います。なぜかといえば、できないからだれかに手伝ってもらおう、そうするとできないことが、友達を作るきっかけになることがあるからです。」

私がこの言葉をここに書きたいと思った理由は、障害がある人も、ない人も友達になれる、なかよくできる、それを伝えたいからです。



「少し手伝って。」

「ありがとうございます。」

一言でその子と話せるきっかけと友達を作るきっかけができるきがしませんか？ほんのちよつとのこと話せるようになればらとてもうれしくありませんか？

私はそう思いました。

私のおばあちゃんは、毎日車いす生活をしています。

おばあちゃんはいつも元気で笑顔です。周りにいる人たちもいつも笑顔な気がします。

車いすだから大変なことがあるったり、できないことがあると思います。でも、はずかしがらないで、「少し手伝って。」

と言える人はすごいと思います。「体が不自由な人ってかわいそうだな。」

と私も思ったことがあります。

でも、できないことがあっても、できることはたくさんあるということ、体が不自由でも自分たちと同じ人間だということをお忘れなようにしようと思います。

みんなで協力することで、できなかったことは必ずできるようになる、障害者がこまっていたら手伝えるようにする、みんなでやればきつとなんでもできる、そう思いました。

高れい者の生きがい

旭市立共和小学校
六年 嶋田 莉子

私はこの夏休みに、銚子市にあるデイサービス「きぼう」に、見学に行きました。

昨年夏に、おじいちゃんが突然、脳こうそくという病気になり入院しました。退院した後も、右手右足にまひがあり、少し日常のことができなくなりました。そのため、デイサービスに行くようになりました。

病気になる前では、週に一回私の家に遊びに来ていましたが、今では車の運転ができなくなりましたので、私たちがおじいちゃんの家に行くようになりました。その時おじいちゃんは、待ち望んでいたかのように、

「いらっしやい、よく来たね」と、笑顔でむかえてくれました。そして、週一回行っている、デイサービスの話をたくさんしてくれたり、デイサービスでやったぬり絵や季節の工作や写真などを、見

せてくれました。笑顔でちよつと照れくさそうに、話をする姿を見て、デイサービスがどんなところか興味を持ち、行ってみたいと思いました。

デイサービスに行くと、新しい建物で明るい感じのする所でした。入ってすぐの所に職員の紹介や、利用者の似顔絵が書いたパネル、季節にちなんだ手づくりの風りんや、海水浴をイメージした工作などが置いてあって、暖かいふん囲気のある所だと思いました。

自己紹介をすると、利用している方が笑顔で、はく手をたくさんしてくれたので、きん張していた気持ち、すぐにふき飛びました。利用者のあるおばあさんに、「何年生なの」と何度も何度も聞かれました。でも私は聞かれるたびに笑顔で、「六年生です」と答えました。

以前おじいちゃんに、何度も何度も、同じ話を聞かされた事がありました。その時、「前にも聞いたよ、おじいちゃん」と、強く言ってしまったことがありました。おじいちゃんは、ちよつと悲しそうな顔をして、話を途中

でやめてしまったことがありまして。後になって、「ちゃんと最後まで話を聞いてあげれば良かったなあ」と、後かいたことがあったので、何度も聞いてくる理由はわからなかったけれど、いやな思いだけは、させてはいけなれないと思いを話をしました。

「このデイサービスに来て、一番楽しいことは何ですか」と聞いてみました。あるおばあさんは、

「みんなと楽しくお話をすること」だと言っていました。私は午後に行ったゲートゴルフとか、みんなで作る季節の工作などの、レクリエーションという答えが返ってくると思っていたので、少しおどろきました。でも、その理由がなんとなくわかりました。それは、利用している方たちも職員の方たちも、かいごする側とされる側という感じではなく、おたがいに信頼している、家族のような感じで、笑顔がたくさんあふれています。

おじいちゃんは、脳こうそくになる前は、ゴルフが大好きで、練習やコースに出たりして、生きが

いや人との交流がたくさんありました。今は限られた場所にしか行けず、限られた人にしか会うことができなくなり、デイサービスに行くことが、今のおじいちゃんにとっての一番の生きがいで、なくてはならない場所だと思いました。

高れい者の方は、生きがいが少なくなったり、社会から孤立したりして、会話や人との交流がなくなったりすると、元気もなくなり認知症やかいごが必要となるリスクが、高くなると聞きました。もっとデイサービスを利用できたり、福祉サービスが充実したり、高れい者が安心して生き生き生活できる社会になったらいいなあと思いました。

帰る時利用者の方に、「また来てね」と、言われました。すぐくうれしかったし、職員の方に、「いつもより二倍も三倍も、利用者の方が笑顔だったよ」と、言ってもらえた時は、来て良かったと思いました。

見学させて頂いて、話をするごとと、笑顔でいることしかできな

かったけど、私にも高れい者の方に、喜んでもらえることができるんだということを知り、小さなことでも、実行していくことが大切だと思いました。今後、私にできることは、おじいちゃんとおばあちゃんが笑っていられるように、寄りそい、支えていくこと。高れい者の方には、人と人とのつながりが一番必要だと実感したので、もっと高れい者の方にも向き合い、守っていくのは私たち若者の役目だという意識を持って福祉の勉強や、ボランティア活動にも、積極的に参加していきたいと思いました。



乗りこえた先の幸せ

銚子市立第五中学校

一年 白土 怜佳

私は、あの日の出来事を小さいながらもよく覚えています。あれは、小学校一年生の秋の日でした。祖父は、長年務めていた消防士を定年退職し、祖母との旅行を間近にひかえ、車も新車を買ひ、第二の人生を歩もうとしていました。

そんな時、祖父は脳出血でたおれ、救急車で運ばれました。そのことを母から聞いた時はとても驚きました。数日前まで元気だったのに、あまりにも突然のことでした。祖父は、大きな病院で六か月も病院生活を送りました。さらに、祖父の右半身にはまひが残りました。そのため、祖母との旅行はなくなり、新車も四週間しか乗れませんでした。祖父は、今まで出来ていたことが出来なくなりました。

そして、祖父のために、家は玄関の階段の高さを低くし、幅を広くし、手すりをつけました。トイレも手すりや杖置きをつけまし

た。家のあちこちの工夫を見ただけで、祖父の脳出血という病気がどれほど重いかわかりました。

それからの日々は、とても大変でした。私は、毎週土曜日に妹と祖父の家へ行きます。毎週、見ていた祖父の姿は、今までとはとても異なるものでした。歩くこと、字を書くこと、はしを持つこと、くつをはくこと、普通の人なら簡単に、あたり前に出来る事が出来なくなっていました。私はそんな祖父の姿を見るのが辛かったです。祖母は、祖父の世話と私達の世話までしなくてはなりません。祖父が脳出血になってからは、祖父はもちろん、祖母までも今までとは、全く違う日々を送る事になってしまいました。

しかし、右半身が使えなくなりましたからといって、辛いことばかりではありません。辛い時間がある分、幸せな時間も増えました。それは、「家族の時間」です。祖父が脳出血になる前、私は祖母と出かけることはあっても、祖父と出かけた記憶はほとんどありませんでした。しかし、今は一緒に出かけることが多くなりました。

出かける場所は限られてしまうけれど、祖父が脳出血になる前は絶対、行かないような所に行ったりしています。

私が中学一年生になって、祖父の手助けをすることも多くなってきました。ペットボトルのキャップを開けたり、袋を開けたり、両手でない出来ないことを頼まれるようになってきました。

祖母は、祖父が脳出血になってからは、休むひまもなく介護をしています。私が手助けしているのは簡単なことで、祖母は祖父を風呂に入れたり、着がえの手伝いをしたりしています。以前の祖母は、友達と出かけたり、私達と出かける機会もありました。しかし今は、友達と出かけるひまもありません。また、休んでいる姿も見ることがありません。祖母は、介護におられる日々を送っています。祖父は、週に三回、介護施設に行っています。介護施設には、体の不自由な人やお年よりがいます。ここで祖父は、リハビリを行っています。たまに祖父は、介護施設でおったおり紙を私達にくれます。季節にあったもので、私が絶

対におれないようなものばかりです。また、誕生日や行事を祝ったりもしています。私が思っていた以上に介護施設は、体の不自由な人やお年よりでも楽しく過ごせるような工夫がされています。

祖父が脳出血になってから、もう六年がたちます。あつという間違ったように感じられます。当初、祖父は歩く速さもゆっくりだったけれど、今は少し速く歩けるようになっていきます。だからといって、不自由でないというわけではありません。不自由なことはたくさんあります。字を書いたり、はしを持つことはまだできません。しかし、その不自由を祖父は祖母と乗りこえています。右半身が使えなくても、幸せな日々を過ごしています。介護は簡単なことではありません。大変です。しかし、祖父はもっと大変で辛いです。自由に動かない体と、これからずっと共に生きていくのです。介護というのは、サポートをするということです。介護される人が少しでも楽に過ごせるように、力になれるように行っているのです。小さな障害の人も、大

きな障害の人も、「悲しい」、「苦しい」と思う気持ちは同じです。でも、乗りこえた先には、幸せが何倍にもなっていて、待っています。

私は、祖父の介護を体験してみても、辛いことも乗りこえる祖父の姿にとっても勇気をもらいました。私も辛いことを乗りこえていきたいです。また、小さなことも役に立てるような人になりたいです。

祖父と祖母。

そして僕に出来ること

旭市立第二中学校

二年 大岩 颯太

僕には大好きな祖父と祖母がいます。僕の事を本当にかわいがり、とても大事に思ってくれています。同じ家には住んでいませんが車で十分ほどの所に住んでいます。小さな頃は保育所や小学校が休みのたびに祖父母の家に遊びに行っていました。小学校の高学年の頃からは、サッカーの練習や勉強等で行く回数が減りました。中学生になってからは、数ヶ

月に一度になつてしまふ事もあり、ほとんど訪れる機会がなくなつてしまいました。それでも、祖父と祖母は、いつも僕を気にかけてくれ、僕が家に居ようが居まいが土曜日には電話をかけてくれ、僕の事を心配してくれます。僕は、心から祖父と祖母の事が大好きで、ありがたく思います。一緒に住むことができれば、毎日のように顔を見て話すこともできるのにといつも思います。

祖父は、僕が生まれた時には既に身体が不自由でした。僕の生まれる少し前に交通事故に遭い、足を悪くし、その後も二度の脳梗塞のため身体を思うように動かす事ができなくなつてしまいました。それでも、祖父は施設やデイサービス、介護支援を受けることなく、自宅で生活し、毎日歩行練習や体操をしています。当たり前のことですが、それらの事を一人で行うことは不可能です。その支えを行っているのが祖母です。

す。体の小さな祖母には、かなりの重労働です。それに加え、日常生活を思うように送ることができない祖父は、精神的に苛立ち、祖母を怒鳴つてしまうことも多々あります。決して怒鳴りたくて祖母を怒鳴っているのではないと思えます。祖父は、以前は朝早くから夜遅くまで休みもとらず自営の仕事をしていたそうです。その時の自分と今の自分の落差に苦しんでいるのだと思います。

祖母は、体に不自由はありませんが、長年喘息を患い、病院に通っています。また、耳の聞こえが悪く、片方の耳は全く聞こえていません。祖母は、体の小さな僕よりも更に小さく痩せています。祖母にとつて、祖父の介助を行うことはとても大変なことで、手足はいつも青あざだらけです。たまにか合わない僕が目にするということは、日常的に青あざができていくのだと思います。祖父を支えきれず祖父と共に倒れてしまうのだそうです。その祖父の光景を想像するだけで僕の心は痛みます。

ず、困った祖父が叱ります。でも、祖母は叱られても怒鳴られても祖父の介助を決して放り出すことはありません。長年一緒に生活した祖母には、祖父の心の葛藤、身体を思うように動かせない歯がゆさがわかつているからだと思えます。しかし、僕は、祖母がかわいそうでたまりません。

現在の日本には、僕の祖父母のようにお年寄りが、お年寄りを介護するという「老老介護」が原因とされる殺人事件や事故が多く報道されています。

なぜ、「老老介護」という状況を作つてしまうのか僕は考えてみました。様々な要因があると思いますが、まずは家族構成です。子供がいても、子供にも家庭、仕事の都合で同居できないことがあります。遠く離れた親を心配しても施設に入所させるのには、金銭的に余裕がなければいけません。また、施設側も介護施設の数や入所可能人数の問題もあります。最近では、介護士による入所者への暴力事件もあり、不安もあります。僕の祖父の場合もそうですが、本人が、他人の介護を希望しないという選

択をする場合もあります。祖父は、子供である母にも遠慮をしているのか世話になろうとしません。

これらの問題を解決するには社会全体で考え、政府の政策の一つにしなければならぬと思えます。介護する側の人員や介護施設で働く人の待遇について簡単には解決できないこともあります。

最後に中学生の僕に出来る事を考えてみました。僕の祖父母の救いは、仲がよく祖母が何より明るいところだと思います。祖母も人間で、祖父に対して頭にくることもあるそうです。でも祖母は母に、明るく祖父の悪口を面白可笑しくいうそうです。話すことでストレスを発散しリフレッシュしているようです。母も両親を常に気にかけて二人の話をよく聞きます。僕や妹の話をするととても喜ぶそうです。「僕に出来る事」それは、今まで以上に祖父母に感謝し、できるだけ顔を見せに行くことだと思います。家族全員が心を通わす事。老人を孤立させない事。また、社会全体で福祉について考える事が僕、そしてこれから社会を担う僕達に出来ることだと思います。

きっかけ

銚子市立第六中学校

三年 山口 沙織

「いくよー」

キャプテンが言った。それに続いて私達もついていった。その日は、朝練で外周を走ることにになっていた。少し憂鬱だったが走り始めた。二周目に入ったときに突然、膝がガクツと落ちた。激痛が走った。しかし、途中で止まるのも良い気分がなかった。なんと走りきった。先生に言おうと思ったが、言えなかった。歩くのもままならないまま、一時間目を迎えた。痛みに耐えるのに精一杯、集中できないまま、授業は終わってしまった。体験したことのない痛みでつらかった。保健室に向かうことにした。なんだか、目に熱いものがこみ上げてきた。母に学校に迎えにきてもらい、病院へ行った。運動会が近かったため、何も異常がないことを願うしかなかった。でも、骨折だった。涙があふれてきた。

学校に戻ると、給食の時間だった。クラスのみんなが心配してくれた。その心配を行動にもはつきり出してくれた。とても嬉しかった。でも、足が自由に動かない悔しさ、他のみんなに心配をかけてしまう悲しさ、思うことはたくさんあったけれど、一人では何もできなかつたので、そのときはみんなに頼るしかなかった。松葉杖なので、移動教室でもゆっくり歩かない。朝は母が、帰りは友達がかばんをもってくれる。掃除の時間は担当場所を変わってくれた。足が自由に動かないし、自分の荷物も持てず、親や友達、先生に迷惑をかけ、移動教室も遅くなった。その中で、申し訳ないと思うことはたくさんあった。しかし、そんな自分にみんなはたくさん励ましの言葉をくれた。その言葉に勇気もらい、頑張れた。清掃当番や給食当番のチェンジを申し出てくれたことも、私はかなり助かったし嬉しかった。

今、私の怪我は治り、以前のよいうな生活を取り戻したが、不自由な思いをしている人たちはいついどのような思いで過ごしているのだろうか。簡単に口では言えない悲しさや精神的なつらさ、その方にしかわからない気持ちはたくさんあると思う。私が感じたように。逆に手伝ってくれる方に感謝して、笑顔を絶やさない方、どんなことにも前向きにとらえ、頑張っている方もいるかもしれない。また、お年寄りの方でも、起き上がるのが大変だったり、色々なところに痛みが出てしまったりして、つらいという思いもあると思う。怪我をする前までは、おじいちゃん、おばあちゃんが杖をついて歩いていたり、押し車を押し歩いていたりするのを見て、「大変そうだな」とひとごとのようにしか思えなかった。だけど、自分が怪我をして、不自由な思いをして気づいた。自分の考えがどうも甘かったことを。本当は、口では言えない悲しさや精神的なつらさ、あちこちにくる痛み、その人にしかわからないつらさがあったのだ。また逆に、手伝ってくれた人へ感謝をしながら笑顔を絶やさず頑張って生活している方もいると思った。

それから、私のお年寄りの方に対しての見方が変わった。前までは、単に「大変そうだ」としか思わなかったのに、今では「大丈夫かな、重たい荷物があれば持たせてあげて、手助けをしてあげたい」と思うようになった。それは、怪我をしてそういう立場になって初めて気づいたことだ。不自由な思いをしている人の思いのすべてを知ることができない。だけど、怪我を通して、杖をついたり、押し車で歩いたりする方の気持ちを知らることができたから、あとはどう向き合っていくかが大切だと思う。だから、単に手助けをするだけでなく、不自由な気持ちをよく理解した上で、これから手を指すべたいと思う。そして、不自由な思いをしてつらいときにもうたくさん人の励まし。その言葉は本当に嬉しいし勇気が出る。だから逆の立場になって、心のこもった励ましの言葉をかけてあげたい。そう思ったときに実感した。小さなきっかけ一つでわかることもあるのだ。だから、このきっかけから得た気持ちを大切にしていきたいと思う。

それから、私のお年寄りの方に

第24回福祉作文コンクール入賞者

小学4年生の部

1席 旭市立矢指小学校

平野 桂大

2席 旭市立中央小学校

江波戸 莉夢

3席 旭市立嚶鳴小学校

浅野 心優華

3席 旭市立共和小学校

宮野 明日葵

小学5年生の部

1席 旭市立豊畑小学校

五十川 彩

2席 旭市立琴田小学校

山崎 彩加

3席 匠瑳市立豊栄小学校

齋藤 望愛

3席 旭市立三川小学校

熱田 真奈

3席 旭市立中央小学校

大塚 莉々

小学6年生の部

1席 旭市立共和小学校

嶋田 莉子

2席 旭市立中央小学校

遠藤 凪夏

2席 旭市立干潟小学校

高橋 郁帆

3席 旭市立嚶鳴小学校

鈴木 那奈美

3席 旭市立矢指小学校

角川 裕大

3席 旭市立干潟小学校

深田 妃色

中学1年生の部

1席 銚子市立第五中学校

白土 怜佳

2席 旭市立第二中学校

加瀬 喬大

2席 旭市立第二中学校

花澤 日向

3席 銚子市立第五中学校

小池 結弓

3席 匠瑳市立六日市場第二中学校

大目 幸輝

3席 銚子市立第二中学校

川端 凜

中学2年生の部

1席 旭市立第二中学校

大岩 颯太

2席 銚子市立第六中学校

谷下田 瑠美

2席 匠瑳市立六日市場第二中学校

大川 晴輝

3席 旭市立飯岡中学校

加藤 希美

3席 銚子市立第二中学校

宮内 彪瑠

3席 旭市立海上中学校

浅野 沙也加

3席 旭市立第二中学校

加瀬 蓮

中学3年生の部

1席 銚子市立第六中学校

山口 沙織

2席 旭市立第二中学校

金谷 太一

2席 旭市立第二中学校

中村 柊斗

3席 銚子市立第六中学校

一原 彩花

3席 旭市立第一中学校

大橋 海音

3席 旭市立海上中学校

加瀬 竜大



- 医療保護施設 海上療養所
- 訪問看護ステーション ソフレイア
- 就労継続支援B型事業所 ワークセンター
- 医療型障害児入所施設・療養介護事業所 聖母療育園
- 生活介護・児童発達支援・放課後等デイサービス(重点) 聖母通園センター
- 児童発達支援事業 旭市子ども発達センター
- 児童発達支援事業 旭市子ども発達センター
- 障害者支援施設 聖マリア園
- 障がい者の就労促進事業所 聖家族園
- 生活介護事業所 みんなの家
- 共同生活援助事業所 聖家族作業所
- 高齢者支援事業所 ナザレの家あさひ
- 口ザリ才高齢者支援センター
- 口ザリ才訪問介護事業所
- 通所介護・介護予防通所事業所 デイサービスセンター・ローザ
- 障害者支援施設 佐原聖家族園
- 生活介護・放課後等デイサービス 聖ヨセフつどいの家
- 共同生活援助事業所 ナザレの家かとり
- 地域生活支援センター 友の家
- 中核地域生活支援センター 海匠ネットワーク
- 障害者就業・生活支援センター 東総就業センター
- 香取市相談支援事業 香取障害者支援センター
- 障害者就業・生活支援センター 香取就業センター
- 障害者相談支援事業 みるみ



このロゴマークは、師イエズス修道女会 北爪悦子修道女 により作成されました。